史跡快天山古墳発掘調査現地説明会資料

令和６年12月22日（日）　丸亀市教育委員会　文化財保存活用課

はじめに

○史跡快天山古墳は、古墳時代前期後半（４世紀中頃）に築かれた前方後円墳です。丸亀平野の東側に南北に長くそびえる横山山塊の南端の尾根上に、前方部を北に向けて築造されており、全長ほぼ100m（98.8m）という規模は同時代の古墳としては四国最大級の古墳です。

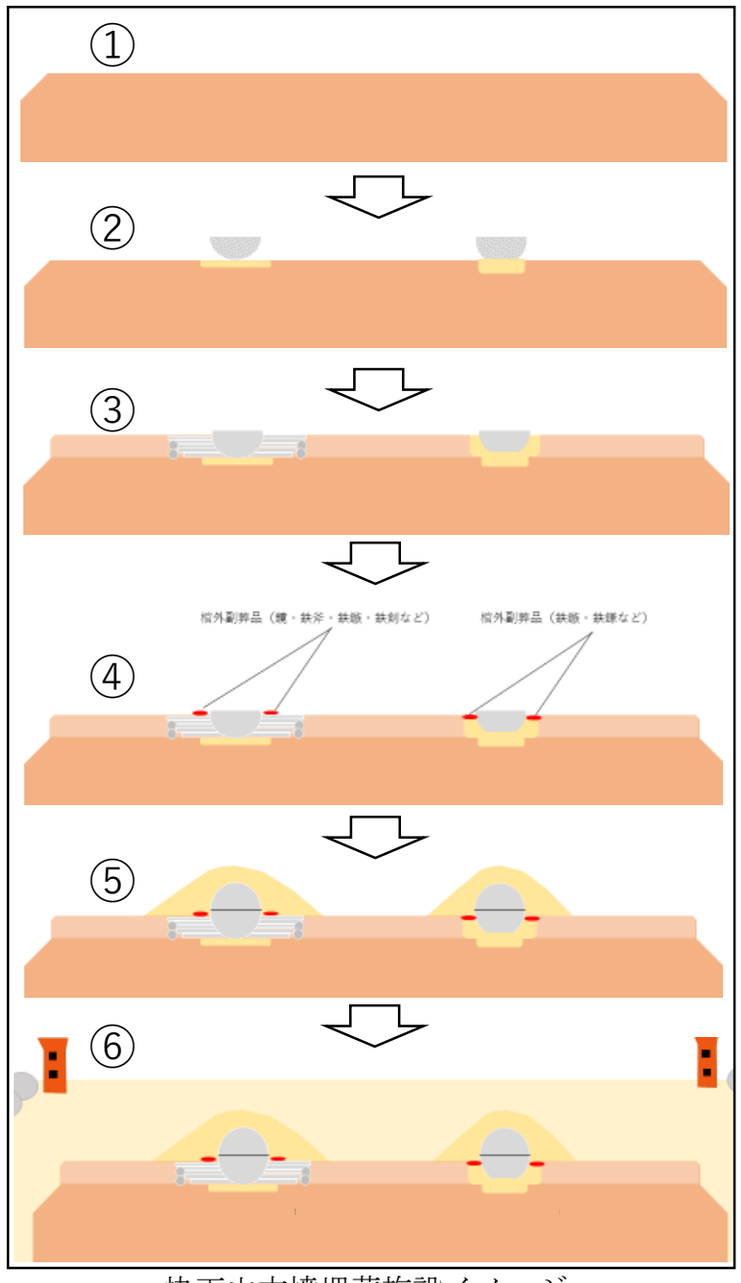
昭和25年に１回目の発掘調査が行われ、３基の刳抜式石棺が見つかりました。その際、多くの副葬品も見つかっています。この時は石棺を中心に調査が行われており、石棺も一度開けられています。

○丸亀市教育委員会では、令和３年度より史跡の保存整備に向けた資料収集のため、発掘調査を実施しています。

昨年度までの発掘調査では、１号石棺・２号石棺の保存状態や周囲の埋葬施設の構造・墳丘盛土との関係、前方部西北の形状などを明らかにすることができました。

今年度の発掘調査では、３号石棺全体・１号石棺北側小口の保存状態や、周囲の埋葬施設の保存状態や構造・墳丘盛土との関係を確認することを目的として行っています。

３棺同時埋葬について



快天山古墳埋葬施設イメージ

※１号石棺と３号石棺は並んでいません

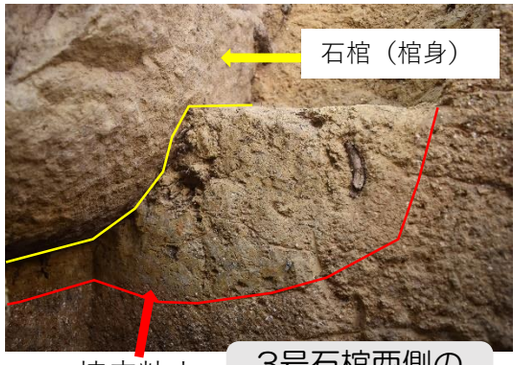
○昨年度までの調査成果と合わせて、３つの埋葬施設が同時に埋められていることがわかりました。

発掘調査成果から想定される、埋葬施設の構築イメージは左図のとおりです。

墳丘盛土の観察から、大きく３段階に分けて盛土が行われていることが確認できます。

①石棺配置前の墳丘盛土
②棺身を配置（棺床部分を少し窪ませるor掘り下げる）
③棺身側面の石積・粘土を設置
④棺外副葬品の配置
　このタイミングで埋葬されたと考えられる。
⑤蓋を閉め、棺蓋を粘土で被覆
⑥同じ墳丘盛土で多い、古墳の形が完成

◎３棺が同時埋葬であることは、当時の埋葬儀礼の方法や、快天山古墳と他地域の古墳との関係や、快天山古墳の被葬者像を考えていく上で重要な発見となりました。



粘土	埋葬施設と同時に積まれた盛土
石棺設置前の盛土	埋葬施設を同時に覆っている盛土

まとめ

今回の発掘調査では、不明だった過去の調査範囲や、その周囲に槨が遺存していることを確認できました。

また、３棺同時埋葬や、その構築方法など、快天山古墳を考えていく上で新たな成果を得ることができました。

第１主体について

○第１主体北側では、板石を棺身に沿うように積み上げた石積構造を確認できました。これは、昨年度調査で確認した南側・中央と同じ構造です。

今回の調査範囲では、古墳時代以降の造作などによって、本来の墳丘盛土上側は失われていることが確認できました。

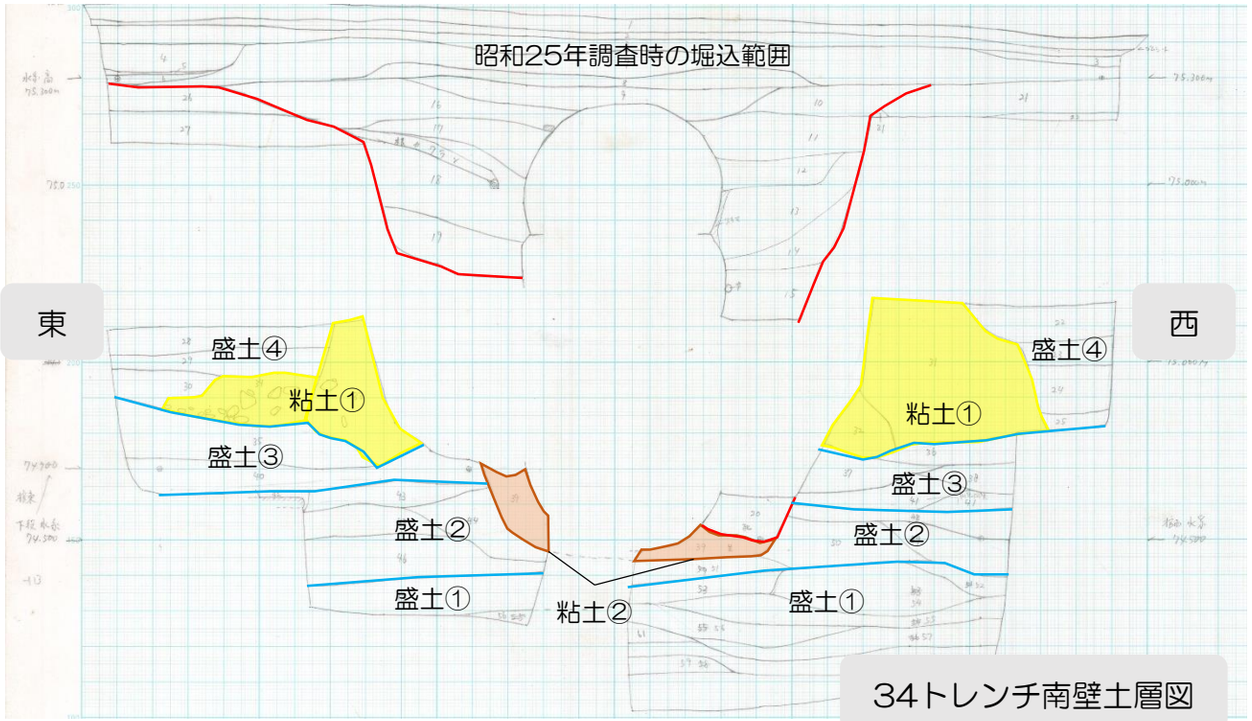
昭和25年調査範囲の埋戻し土中からは、副葬品の取り残しと考えられる管玉が出土しました。

第３主体について

３号石棺北側小口
（北西より撮影）

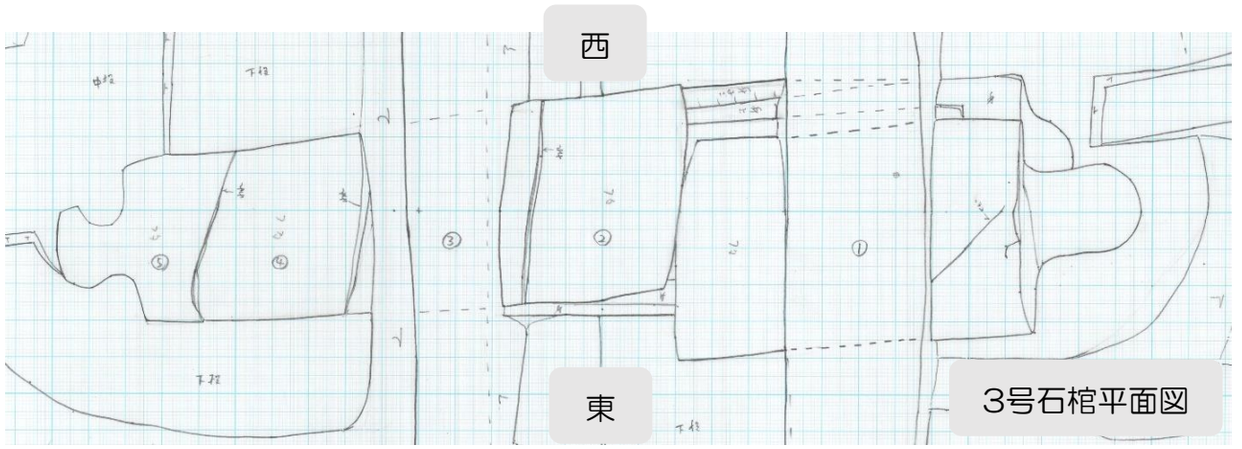
３号石棺南側小口
（南より撮影）

第３主体について



34トレンチ南壁土層図

○第３主体では、石棺周囲は失われていたものの、外周部分に粘土槨の残存部を確認することができました。土層の堆積状況から、蓋を覆う上部の粘土①と、棺床部分の粘土②の２種類あることが分かります。また、盛土も大別４種類あり、粘土槨との関係から盛土と粘土槨の構築は並行して行われていることが明らかになりました。



3号石棺平面図

○３号石棺は、1950年の調査時に一度蓋が開けられています。その際に５つに割れてしまったことが確認されており、発掘調査でもその状況を確認することができました。

石棺表面の観察では、チョウナやノミによる加工痕を観察することができます。

また、蓋内面には赤色顔料が全面に塗られていることが確認できます。

3号石棺内面
（南より撮影）